The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中世後期の時を表す語彙 ： 『太平記』の「今朝」「今夜」などをめぐって
Author(s)	玉村, 禎郎
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1993, 27, p. 17-35
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47823
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中世後期の時を表す語彙

――『太平記』の「今朝」「今夜」などをめぐって――

玉村禎郎

一

中世に書かれた古記録や当時存在した往来物の類には、「昨夕」[1]（『師守記』『祇園執行日記』）、「昨晩」（『花園天皇宸記』）、「昨夜」（『園太暦』『南都往来』）、「今暁」（『師守記』『園太暦』）、「今旦」（『師守記』）、「今朝」（『垂髪往来』『勘仲記』『師守記』）、「今夕」（『伏見天皇宸記』『園太暦』）、「今晩」（『花園天皇宸記』）、「今夜」（『冬平公記』『園太暦』『匡遠記』）、「明暁」（『師守記』）、「明旦」（『明月記』『公衡公記』）、「明朝」（『明衡往来』『伏見天皇宸記』）、「明夕」（『釈氏往来』『公衡公記』『南都往来』）、「明夜」（『貴嶺問答』）などと表記される語が見られる。これらは、「昨―」「今―」「明―」と「―暁」「―旦」「―朝」「―夕」「―晩」「―夜」との組み合わせによって成ったものである。組み合わせから見ると、「昨暁」「昨旦」「昨朝」「明晩」という漢字列の存在も期待されるところであるが、今回の調査では管見に入らなかった。調査の範囲内にたまたま無かっただけなのか、元々使用されに

くいためなのか、理由は色々と考えられよう。

これらの多くは後世の資料から見れば漢語として音読みされるものであるが、当時の読みについてはなお検討を要する。

ところで、このように表記される語は、仮名文、漢字仮名交じり文にも見出せるものなのであろうか。この点について、小論では『太平記』を資料として具体的に考察することにする。

二

『太平記』を資料としたのは、本作品が豊富な語彙資料であり、しかもその語彙が記録体などのものに比べてより日常的なものと考えられること、漢字で表記された語の読みの確定できる場合があることなどから、このような研究を始めるのにふさわしいと考えたからである。

『太平記』には諸本が多いが、今回調査した本は次のとおりである（□は小論で使用する略号である）。

神　神田本、穂久邇文庫蔵。影印本（昭和四七年　汲古書院）をテキストとして使用。

玄　玄玖本、尊経閣文庫蔵。影印本（昭和四八～五〇年　勉誠社）をテキストとして使用。

西　西源院本、竜安寺蔵。翻刻本（昭和一一年　刀江書院）をテキストとして使用。

これら神玄西は甲類本の写本で中世のものである。甲類本は古態を保つ点が多いとされるもので、この類は神田本系、玄玖本系、西源院本系、南都本系の四系列に分けられている。この四系列のうち、南都本系は流布本系と本文詞章が近いので今回は除き、他の三系列の代表とされる各本について調査した。特に、玄玖本系は「古態の太平

(2)

記の標準的テキストとしての条件を最もよく備へてゐる」[3]点で注目されるが、その玄玖本系諸本の中でも、玄は「一筆書写の完本であるばかりでなく、書写が丁寧で誤脱が少いこと、本文と同筆の傍訓濁点が施されてゐること、保存状態が極めて良好であることなどの諸点に於いて、他本にまさつてゐる。[4]」とされる本である。それゆえ、小論でも玄の表記を重視して考察することにする。

このほか、読みを参考にするために、近世の刊本から慶[5]元[6]寛[7]の三本をとりあげた。

以上、写本及び、読みを多く示すなどの特徴を有する刊本[8]を選んで調査したが、このほかにも多くの諸本がある。[9]ここでは、おおよその見通しをつけることを目的としたので、今回触れられなかった本については別の機会に述べることにする。

三

小論冒頭で問題にした漢字列のうち、『太平記』に見られるものは「昨朝」「昨夜」「今朝」「今夜（今宵、小宵）」「明朝」「明夜」である。このように『太平記』の本行では神の「こよひ」や近世の刊本の「けさ」の仮名書き例などを除けば全てが漢字で書かれている。したがって、このような漢字列の読み（音か訓か、或いはその双方か）の多くは主に連結符やルビなどによって確認されることになる。以下、関連語句「夜部」「夕部」「昨日の朝」「昨日の夜」などにも触れながら具体的に考察する。

1 昨朝

「昨日ノ朝」が、

①「…昨日ノ朝敵三浦ニ有ト聞テ、…」[10]　（巻第三十一）

のように使われている。しかし、この箇所は玄では「昨朝」と表記されている。玄のこの箇所は「きのふの朝」[11]ではなく[12]、「サクテウ」と読むべきかと思われる。ただ、「昨朝」の表記は、今回調査した諸本の中ではこの玄の一例しか見られない（他の諸本及び玄の他の箇所では「昨日ノ（の・之）朝」が用いられている）こと、『色葉字類抄』にも無いことなどから、漢語「サクテウ」はいまだ一般化していなかったと考えられる。

2 昨夜

「昨夜」と表記される例には、

②昨夜春園風雨暴。和レ枝吹落棣棠花。　（巻第三十）

③「…其先蹤ニ付テ今仙蹕ヲ被レ促事、衆徒何ゾ異儀ニ可レ及乎。就レ中昨夜ノ光物臨幸ノ道ヲ照ス。…」　（巻第十八）

の二例がある。

②は玄元に音読符が見られる。この玄の音読符により、中世においてすでに「サクヤ」と読まれていたことがわかる。ただ、この②は漢詩での使用例である。③は元に音読符が施されており、寛には「昨夜」の「夜」の右傍に「や」のルビが施されている。しかし、神玄西などの写本では読みが示されていないので、近世初頭の「サクヤ」の読みをいつ頃まで遡らせることができるのかが問題となってくる。

この③の中世の読みとしては、「よ（う）べ」「きのふの夜」なども考えられよう。しかし、「よ（う）べ」には「夜部」と表記されている例があり、それらの例の使用されている文の表現が③の場合と著しく異なるので、やはり「昨夜」を「よ（う）べ」と読む可能性は低いと思われる。また「きのふの夜」と読む可能性は一層低いように思われる。(13)

以上の考察から、③はすでに中世において「サクヤ」と読まれたものと推測される。しかし、いずれにしても、この「サクヤ」という語は『太平記』では極めて使用頻度の低い語であった。「サクヤ」は『色葉字類抄』や『平家物語』（日本古典文学大系本）などにも見られず、『太平記』の成立時にはまだ一般化していなかったものと考えられる。この③は後醍醐天皇が吉野へ臨幸する場面を僧兵が語った一節で、かなり改まった表現になっており、「何ゾ〜可キヤ」など漢文訓読的要素も見られる。このような表現であるからこそ、「サクヤ」が使用されたものと考えられよう。

このように、『太平記』には「昨夜」の漢字列はわずか二例しかないが、それは〈昨夜〉のことを話題にすることが少なかったためではない。〈昨夜〉を意味する表現としては、まず「昨日の夜」「昨日の晩景」などの句的表現を挙げることができる。また、

④「大将已ニ夜部子刻ニ落サセ給テ候間、無レ力我等モ丹波ノ方ヘト志テ、罷下候也。…」（巻第八）

に見られる和語「夜部」を挙げることができる。

④は元に「夕部」とあるが、これは新しい形を反映しているものと考えられる。中世の写本では、

神　夜部ヘ
玄　夜部ヘ
西　夜部ヘ

と表記されており、中世には「よべ」または「ようべ」と読まれていたことがわかる。「夜部」の漢字列は、

⑤諸人驚テ、「誰ソ。」ト問ヘバ、夜部落タリト沙汰セシ饗庭命鶴丸ガ声ニテ、（巻第二十九）

⑥「夜部事ノ由ヲモ申サデ、罷出候シガ、早落タリトゾ思召候ツラン。…」（巻第二十九）

にも見られる。⑤⑥は玄西に「夜部」と表記されており（神は当該部分を欠いている）、玄にはこの⑤に訓読符が施されている。また、慶では⑤に「ヨヘ」のルビが施されている。この⑤⑥は写本にルビがないため中世における読みは明らかでないが、④と同様に「よべ」または「ようべ」と読まれたものと思われる。なお、元は慶と異なり、⑤の「夜部」には「ユフベ」のルビ（と訓読符）が、⑥の「夜部」には「ユウベ」のルビ（と訓読符）が施されている。

⑦「夜部宣シ事ヲ実ト思ナバ、孫程ノ人ニ被ニ出抜一マシ。」　（巻第六）

⑦は玄に「夜部」[14]とあり、その「夜」の右傍に小さい「夕」の漢字が見られる。西には「夕部」とある（神は当該部分を欠いている）。この玄の記載は「夜部」のほかに「夕部」の表記ないしは語の存在を示唆しているようであるが、この玄の書き方から判断する限りは「夜部」が本来の形であったものと思われる（西も前の④～⑥では「夜部」と表記している）。

なお、前述したように、⑤⑥は元では「夜部」に「ユフベ」「ユウベ」のルビが施されているが、これは漢字の部分では古い形を残し、ルビの部分では新しく一般化した〈昨夜〉の意の「ゆふべ」を用いたものと考えられる。また、この⑦は慶元寛ではいずれも「昨夜」と表記され、このうち慶には「サク」のルビ、寛には「さくや」のルビが施されている。このことは、近世初頭には漢語「サクヤ」が一般語になっていたことを物語っていよう。

このように、『太平記』の諸本は「よ（う）べ」「ゆふべ」「サクヤ」の三語の動きのすがたを反映している。ところで、「夜部」の使用されている④～⑦の文はいずれも、「昨夜」の表記が見られる②の漢詩や③の天皇の臨幸の場面を語る改まった表現とは異なっていて、さらに四例中少なくとも三例が会話の中[15]での使用であるという事実も看過できない。

以上、〈昨夜〉を意味する語句をとりあげて考察した。少なくとも玄を見る限りでは漢語「サクヤ」はまだ一般化しておらず、一般には和語「よ（う）べ」或いは句的表現「昨日の夜」などが用いられていたことが明らかになった。

3 今朝

漢字列「今朝」の使用は約二十例である。うち、中世での読みが確認できるものは半数である。

⑧越ノ兵ハ今朝ノ軍ニ遠懸ヲシテ人馬共ニ疲レタル上無勢ナリケレバ、呉ノ大勢ニ被レ囲、一所ニ打寄テ磬ヘタリ。（巻第四）

⑨「…乍レ去天鑑レ真、虚名イツマデカ可レ掠ニ上聞一候ナレバ、先召ニ随テ陣下ニ参ジ、犯否ノ御糺明ヲ仰ギ候ベシ。但俊季ニ於ハ、今朝已ニ逐電候ヌル間召具スルニ不レ及。」（巻第十三）

⑧は慶寛では「けさ」と平仮名で表記されているが、玄に音読符が施されているので、中世には「コンテウ」の読みのあったことがわかる。

⑨は玄に音読符が見られ、すでに中世において漢語として読まれていたことがわかる。なお、慶元に読みが示されていないが、寛に「今朝（てう）」とあって、近世にも音読みの例が見られる。

⑧はかの有名な越王勾践と呉王夫差との戦いの一部を和げて引用している部分である。⑨は大納言公宗が定平朝臣に向かって話しかけている部分であって、「間」「逐電」に記録体特有の使い方が見られ、全体が硬い表現になっている。

玄で「コンテウ」の読みが確認できるものは右の二例だけだが、その二例とも、漢文や記録体の影響のある箇所での使用ということが指摘できる。

⑩今朝中宮ノ召有テ北山殿ヘ参リ給ヌト申ケレバ、中納言鬢ノ髪ヲ少シ切テ、歌ヲ書副テゾ被レ置ケル。（巻第四）

⑪今朝マデ十万余騎ト見ヘツル寄手ノ勢、残少ナニ被二討成一、僅ニ生タル軍勢モ、馬物具ヲ捨ヌハ無リケリ。（巻第九）

右の⑩⑪は慶寛に平仮名で「けさ」と表記されている（うち、⑩には元に「ケサ」のルビと訓読符がある）が、既に玄にはそれぞれ捨て仮名「サ」と訓読符があるので、中世から和語の形で読まれていたことがわかる。

⑩は左衛門佐局に住む家の某が中納言藤房に話した事柄を引用の形で地の文に組み込んだ表現であり、⑪は千葉屋城の寄手が敗走した場面を語った地の文であるが、その中で和語「けさ」が使用されているのである。

⑫「…兄ノ万寿ヲバ五大院右衛門可レ蔵方有トテ、今朝何方ヘヤラン具足シツレバ心安ク思也。只此亀寿ガ事思煩テ、露ノ如ナル我身サヘ、消侘ヌルゾ。」（巻第十）

は、玄に訓読符があり、「けさ」であると考えられる。女性の側室が目下の男性に対して話しかけている言葉であるにもかかわらず、元には音読符が施され「コンテウ」と読まれている。しかし、それは近世に「コンテウ」が一般化したためであろう。なお、寛のこの箇所は平仮名で「けさ」と表記されており、古い形を残している。

右の⑫のほかにも、玄の訓読みの箇所が刊本によっては音読みになっている場合がある。それらは、

⑬「是ハ今朝此城ニ向テ打死シテ候ツル、本間九郎資貞ガ嫡子、源内兵衛資忠ト申者ニテ候也。…」（巻第六）

玄の表記［今朝サ（「以前イ」と右に傍書あり）］

⑭主ノ僧、「サル人ハ今朝マデ是ニ御坐候ツルガ、行脚ノ御志候トテ、何地ヘヤラン御出候ツル也。」トゾ答ヘケル。（巻第十三）

玄の表記［今_朝］

⑮今朝迄ハ気色シホレテ、常ニハ涙ヲ押拭ヒ給ケルガ、人間ノ事ニ於テハ頭燃ヲ払フ如ニ成ヌト覚テ、（巻第二）

玄の表記［今ケ朝サ］

⑯追手ノ合戦ハ、今朝辰刻ヨリ始マ(ッ)テ、馬煙東西ニ靡キ、時ノ声天地ヲ響カシテ攻合ケレ共、（巻第九）

玄の表記［今_朝］

⑰今朝ノ浜ノ合戦ニ、三百余騎ニ討成レ、剰敵ニ後ヲ被レ遮テ、（巻第十）

玄の表記［今_朝］

⑱今朝ノ卯刻ニ出雲ノ富田ヲ立テ、酉剋ノ始ニ京ニ著ス。（巻第十三）

玄の表記［朝ケ］

である。このうち、⑬⑭は会話文、⑮～⑱は地の文での使用である。

以上の⑩～⑱は玄で「けさ」と読まれることの確認できる例の全てであるが、これらの例によって、「けさ」が会話文で性別や身分の差に関係なく使用されていること、地の文で種々の文体に使用されていることなどがわかる。

和語「けさ」のこのような特徴は漢語「コンテウ」との大きな相違点である。「コンテウ」が「けさ」に比べ使用例が少ないのは、「コンテウ」の使用される文体が漢文や記録体の影響を受けているものであるのに対し、「けさ」の使用される文体には特に顕著な制約がないためと考えられる。つまり、「コンテウ」は少なくとも玄を見る限りまだ一般化していない漢語であったと言えよう。ちなみに、『色葉字類抄』や『平家物語』（日本古典文学大系本）には「けさ」が見られるが、「コンテウ」は見られないのである。「コンテウ」はこの『太平記』の頃から一般語化の兆しを見せはじめたと言えよう。

4　今夜

漢字列「今夜」は『太平記』に多く見られるが、中世において「コンヤ」と読んだことの明らかな例はない。

⑲「今夜ノ御琵琶祈願ノ御事有テ遊バサルヽナラバ、御願不レ可ニ成就一。…」（巻第十三）

⑳「…只今夜ノ中ニ加賀国ヘ引退セ給テ、京都ノ御勢下向ノ時、力ヲ合セ兵ヲ集テ、還テ敵ヲ御退治候ハンニ、何ノ子細カ候ベキ。」（巻第二十一）

⑲⑳の両例とも玄には訓読符が見られることから、中世には訓で読まれていたことがわかる。⑲は元に音読符が施され、⑳は慶に「今夜（コンヤ）」、寛に「今夜（こん）」とあり、両例とも近世初頭には「コンヤ」と読まれることもあったと思われるが、これは後世の形を反映しているものと考えられる。

㉑「…今夜逆寄ニシテ打散シテ捨候バヤ。」　（巻第六）

この㉑は玄に訓読符と捨て仮名「イ」とが施されており、中世には訓で読まれていることがわかる。「イ」の捨て仮名から訓は「こよひ」と考えられる。なお、元に音読符が、寛に「こんや」のルビが施されている。

右の⑲〜㉑は玄で「こよひ」と読まれているが、近世の刊本では「コンヤ」と読まれることもあった。これに対し、

㉒「…今夜余ニ雨風烈シクシテ、物騒ガ〔シ〕ク候間、…」　（巻第三）

㉓「…今夜既ニ柱松ニ着テ候ガ其勢僅ニ六七百騎ニハ過ジト聞ヘ候。…」　（巻第六）

㉔「両人ノ振舞イツモノ事ナレ共、殊更今夜ノ合戦ニ、旁手ヲ下シ命ヲ捨給ハズバ、叶マジトコソ見ヘテ候ツレ。」　（巻第八）

㉕故郷ニ今夜許ノ命トモシラデヤ人ノ我ヲ待ラン　（巻第十一）

の例は玄で「こよひ」と読まれ、刊本でも読みの確認できる場合は全て「こよひ」である。また、

㉖大方ノ年ノ暮ゾト思シニ我身ノハテモ今夜成ケリ　（巻第十七）

㉗沈香火底ニ坐シテ吹レ笙ト云ヌル追儺ノ節会ハ今夜也。　（巻第二十四）

㉘「事ノ体已ニ急也。今夜急ギ逃去テ命許ヲ助カレ。」　（巻第二十八）

は神に「こよひ」或いは「今夜（こよひ）」と表記されている（このうち、㉘は西に「今宵」となっている）例であり、刊本でも読みの確認できる場合は全て「こよひ」である。

このように、㉒～㉘の「今夜」は漢語「コンヤ」が一般化した近世においても、中世以来の「こよひ」の形で読まれているものであるが、このような例の中には㉕㉖のような和歌の例が見られる。なお、

㉙「…只今夜ノ御遊ヲバ可レ被レ止トコソ存候へ。」　（巻第三十三）

㉚サレドモ武運強ケレバニヤ、敵今夜ハ寄来ラズ。　（巻第十四）

は中世に「こよひ」と読まれた例（㉙は玄に訓読符が施され、㉚は西に「小宵」と表記されている）であるが、近世の刊本には読みが示されていない。

以上に見てきたように、中世に「こよひ」と読まれたことの明らかな例があるのに対し、中世に「コンヤ」と読まれたことの明らかな例は見出せない。『色葉字類抄』（前田本）にも

此夕コヨヒ　此夜同　今宵コヨヒ在百詠　（「古」、天象付の項目）

とあるが、「コンヤ」は無い。『太平記』の成立した頃には「コンヤ」はまだ一般語化していなかったのかもしれない。

ところで、漢字列「今夜」の意味について注目すべきことがある。

㉛懸リケレドモ、六波羅ニハ未曽是ヲ知ラズ。夜明ケレバ東使両人内裏へ参テ、先ヅ行幸ヲ六波羅へ成奉ント

テ打立ケル処ニ、浄林房阿闍梨豪誉ガ許ヨリ、六波羅ヘ使者ヲ立テ、「今夜ノ寅ノ刻ニ、主上山門ヲ御憑有テ臨幸成リタル間、三千ノ衆徒悉ク馳参リ候。近江・越前ノ御勢ヲ待テ、明日ハ六波羅ヘ被レ寄ベキ由評定アリ。…」トゾ申タリケル。

（巻第二）

㉛の直前には、後醍醐天皇が山門に臨幸した由[16]が公表されたという記事があるので、ここの「今夜」は夜が明けてから直前の寅の刻を指していることがわかる。㉛以外の漢字列「今夜」が〈今日の夜〉〈今の夜〉の意味で使用されているのに対し、この㉛は〈昨夜〉の意味で使用されているので注目されるのである。「こよひ」には夜が明けて後、直前の夜を指して言う用法が古くからあり[17]、中世にもその用法が見られるのであるが、それはこの㉛の用法と重なるものである。

この㉛は中世の写本に読みが示されていないのであるが、右の点から中世において「こよひ」と読まれた可能性が高いと言える。ただ、このことは先の問題と関連するところで、『太平記』の成立時期、または少なくとも玄の書写時期に漢語「コンヤ」がどの程度使われていたのかということや、使われていた場合に〈昨夜〉の意味で使用されることが無かったのかということなども問題になり、なお検討する余地がある。

いずれにせよ、「今夜」という表記のうち、中世における読みの確認できるもの全てが和語の「こよひ」の形であること、漢字列「今夜」には〈昨夜〉を意味する用法があったことなどがわかる。

5　明朝

「明日」が、

㉜「…然レバ我明日士ト共ニ敵ノ囲ヲ出テ呉王ノ陣ニ懸入リ、…」　（巻第四）

のように使われている。しかし、この箇所は酉では「明朝」と表記されている。ただ、この「明朝」は音と訓のいずれで読むべきか定かでない。なお、〈明朝〉或いは〈明日〉の意味で「旦日」が使用された例があるが、それはかの有名な項王と沛公の説話の一部を和らげて引いている部分においてである。その部分は『史記』や『十八史略』にも「旦日」とあることから『太平記』が引用した本にも「旦日」とあってそのまま引いたものと考えられる。

6　明夜

漢字列「明夜」の例には、

㉝「明夜必寮ノ御馬ヲ用意シテ、東ノ小門ノ辺ニ相待ベシ。」　（巻第十八）

㉞已ニ明夜木幡峠ニ打寄テ、将軍・左兵衛督・高・上杉ガ館ヘ、四手ニ分テ夜討ニ可寄ト、相図ヲ定タリケル前ノ日、　（巻第二十四）

の二例がある。両例とも亥などの写本にはただ「明夜」と表記されていて、読みが示されていない。一方、元には

両例ともに音読符が施されている。また、㉝は寛に「みやうや」、㉞は慶に「アクルヨ」のルビがそれぞれ施されている。このように、近世初頭には訓読み、音読みの両形が見られるが、中世にはどのように読んでいたのか明らかでない（なお、神には「其明ル夜」と表記して〈翌夜〉を指す例がある）。

いずれにせよ、『太平記』での読みは明らかではないが、「明夜」という表記が存在したのである。

四

以上、『太平記』において、漢語として読まれた可能性のある時を表す語彙「昨朝」「昨夜」「今朝」「今夜」「明朝」「明夜」について考察し、併せて関連する和語の語句についても言及した。

ただし、このうち「昨朝」「今夜」「明朝」「明夜」は少なくとも今回見た中世の写本では漢語として読まれたことの確かな例が見られなかった。一方、「昨夜」と「今朝」は玄玖本によって漢語として読まれたことが明らかな場合があるが、それらは漢詩の中で使用されたり、漢文や記録体の影響を強く受けている文の中で使用されたりしているものであった。

このように『太平記』には、小論冒頭の古記録や往来物に数多く見られた語の半数以上が用いられていないのである。それは、古記録や往来物がその資料の性格上、『太平記』に比べて、書記時点である現在を軸として、その前後関係から（相対的に）時間を示す表現が多いということにも関係があるかもしれない。

しかしながら、一方では『太平記』の成立時期には、これらの語が漢語としてまだそれほど一般化していなかったということが大きな理由として考えられる。これらの漢語は『太平記』成立の頃からようやく一般化の兆しを見

せはじめるのである。すなわち、当時〈昨朝〉から〈明夜〉までの時に関する意味分野で、和語や句的表現による体系があったところに、ようやく新しく漢語が一部加わりはじめたのである。ただし、それらの漢語の使用には位相・文体の上で制限が見られる。しかし、近世初頭の『太平記』の刊本では、時を表す漢語はその数を増し、使用される場面を広げるようになっている。また、『日葡辞書』には小論の冒頭に挙げた例の多くが漢語として掲載されている。[18] このような語の多くは『太平記』の成立時期から中世末期にかけて一般化したものと思われる。その推移の詳細の考察と、今回とりあげられなかった『太平記』の他の諸本の調査については今後の課題としたい。

注

(1) 小論で「　」は文字列または読みを示し、〈　〉は語（句）の意味を示す。
(2) 『日本古典文学大辞典』（岩波書店）の「太平記」の項目（鈴木登美恵執筆）などを参照。
(3) 玄玖本『太平記』五（勉誠社）の解題（鈴木登美恵執筆）による。
(4) 同右。
(5) 慶長十四年刊平仮名交じり十行古活字本（内閣文庫蔵）。本書はそれ以前に刊行された古活字本の漢字漢文である箇所を平仮名で書き下しているところもあり、その読みを補いうることがある本である（岩波日本古典文学大系『太平記』一の解説を参照）。
(6) 元和八年杉田良庵刊片仮名交じり付訓整版本（学習院大学文学部国語国文学研究室蔵）。本書は比較的精細な訓をもつ最初の版本として意義深いとされる。
(7) 寛永元年刊平仮名交じり十一行付訓古活字本（京都大学文学部蔵）。本書は精細な訓をもち、しかも元とは異なった読みをしている場合がある。
(8) 小論で「刊本」という時は、慶元寛の三本を指し、それ以外の刊本は含まない。
(9) なお、永和本（巻第三十二のみの零本）は現存最古の写本で最古態を残すものと考えられているが、小論で問題にす

る語は漢字だけで表記されており（連結符やルビなども無く）、読みが不明であるためとりあげない。

（10）例の引用は岩波日本古典文学大系本による。同書の底本は慶長八年古活字本である。ただし、同書のルビには校訂者の判断が入っており、小論では漢字列の読みを問題にするので、ルビは省いて引用する。

（11）平仮名で和語を、片仮名で漢語を示すことにする（それぞれ歴史的仮名遣、字音仮名遣による）。ただし、表記形を示す場合は原表記の文字種のままとする。

（12）「きのふの朝」と読む場合は、結局「昨」の漢字を「きのふ」と読むことになるわけであるが、それは『太平記』では次のような場合に限られるようである。すなわち、

昨為一北闕蒙レ悲士一。今作二西都雪レ恥尸一。　（巻第十二）

のような場合である。この漢詩の中の「昨」には、玄はルビを施していないが、「今」には「ケフ」のルビを施していて、しかも「昨」と「今」とが対句の表現の中で使用されていることを併せ考えると、この箇所の「昨」は「きのふ」と読むべきであろう。しかし、このような漢詩文の場合を除けば、「きのふ」は漢字列「昨日」で表記されているのである。それゆえ、漢詩文以外で使用されている「昨」を「きのふ」と読む可能性は低く、例①の箇所の玄の相当部分の「昨朝」も「きのふの朝」と読むとは考えにくいわけである。

（13）注（12）と同様の考え方ができる。

（14）「夜」と「部」との字間に音読符ととれる棒線があるが、この場合は訓読符が期待されるところである。

（15）例⑤の「夜部」は、「…ト沙汰セシ」という引用句の外にあるとも考えられようが、もし引用句に含まれると考えられるならば、この「夜部」も例④⑥⑦に準じて扱えることになる。その場合は、四例全てが会話またはそれに準ずる文での使用ということになる。

（16）実際には大納言師賢が天皇を装って山門へ行った。しかし、ここの「今夜」の解釈は変わらない。

（17）「往古通用日の初め」（『南方熊楠全集』二　平凡社）や参考文献（3）などによる。

（18）しかし中には、「コンテウ」に対する「けさ」、「コンヤ」に対する「こよひ」のように、和語も掲載されている。

［参考文献］
（1）前田富祺「漢語副詞の変遷」（『国語語彙史の研究』四　和泉書院）／「漢語副詞の種々相」（『副用語の研究』　明治書院）
（2）遠藤好英「記録体における『夕方』の語彙の体系――『後二条師通記』の場合――」（『国語と国文学』55―5）／「記録体における『朝』の語彙――『後二条師通記』の場合――」（『国語学研究』19）など。
（3）井手至「古代語『こよひ』の意味用法をめぐって」（『人文研究』38―3）

小論所引の用例などに使用されている文字は印刷の都合上、現行の字体に改めた。

（大学院後期課程学生）